国内で気を付けたい動物由来感染症

ペットと接するときに気を付けたい動物由来感染症を表にまとめました。

多くの種類がありますが、通常は感染しても発症しなかったり、発症しても軽症で済むことがほとんどです（狂犬病を除く）。ただし、抵抗力が弱い乳幼児、高齢者、免疫状態が低下した人では重症化することもありますので、動物とのふれあいルールをしっかりと守って予防しましょう。

動物から人への主な感染ルートと、国内で気を付けたい動物由来感染症

主な感染ルート	病名（関連する主な動物）
かみ傷、ひっかき傷、濃厚接触	パスツレラ症（犬、猫）、猫ひっかき病（猫）、カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症（犬、猫）、狂犬病*（犬）、皮膚糸状菌症（犬、猫）
ふん中の病原体が口から入る・吸い込む	エキノコックス症（犬）、トキソプラズマ症（猫）、回虫症（犬・猫）、Q熱（犬、猫）、オウム病（鳥）、サルモネラ症（カメ、イグアナなどハ虫類）
くしゃみ、鼻水中の病原体を吸い込む	コリネバクテリウム・ウルセランス感染症（犬、猫）
尿などに含まれる病原体への接触	レプトスピラ症（犬、ネズミ）、ブルセラ症（犬）

* 日本では1957年以降発生していません

パスツレラ症、猫ひっかき病、カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症

いずれも、犬や猫が口の中などに普通に持っている菌による感染症です。かまれたりひっかかれたりすることで人にうつりますが、症状が出ないことも多く、発症しても軽症（傷口の腫れ、痛み、リンパ節の腫れなど）で済むことがほとんどです。しかし、高齢者や免疫状態が低下した人などで、まれに重症化（血管腫、敗血症など）することもあります。

コリネバクテリウム・ウルセランス感染症

コリネバクテリウム・ウルセランス菌を持っている犬や猫との濃厚接触によりうつり、ジフテリアに似た症状（発熱、咳、咽頭に偽膜形成などの呼吸器症状）を示すことがあります。国内では2001年の初症例以来、2013年までに12症例が発生しており、患者は高齢の方に多い傾向があります。12症例のうち10症例で犬や猫からの感染が疑われています。

サルモネラ症

胃腸炎をおこす食中毒（菌）として知られていますが、国内では子供や高齢者がペットのミドリガメなどのハ虫類から感染した事例があります。主な症状は腹痛、下痢等の胃腸炎症状ですが、まれに重症化することもあります。国内外でカメ等のハ虫類の糞便中のサルモネラ菌を検査したところ、保菌率が 50 – 90%であったと報告されています。

オウム病

オウムやインコなど愛玩用の鳥から感染することがあります。人が感染すると風邪に似た症状を示します。国内では鳥の展示施設における職員や来場者の間での集団感染が報告されています。

環境科学研究所の取り組み

環境科学研究所では、大阪市動物管理センター（おおさかワンニャンセンター）と共同で、平成23年度から愛玩動物に由来する感染症を防止し、動物の愛護および適正な飼育を推進するために、市内の犬や猫を対象とした動物由来感染症の病原体保有状況を調査しています。両感染症ともに、動物の病原体保有率は他都市と同じぐらいのレベルでした。大阪市内での人への感染事例は今のところ報告されていません。予防には動物とのふれあいルールを守ることが大切です。

大阪市内の犬や猫における病原体保有状況（平成23年度～25年度）

病原体	犬（125頭）	猫（137頭）
コリネバクテリウム・ウルセランス	0頭(0%)	5頭(3.6%)
カプノサイトファーガ・カニモルサス	89頭(71.2%)	77頭(56.2%)

いずれも健康状態の悪化した猫で、内４頭は野良ネコでした

どのような生活状態の犬、猫でも口の中に常在菌として持っていました

動物由来感染症についてもっと知りたいときは

- 厚生労働省HP中の動物由来感染症のページでは、国内外の動物由来感染症について詳説しています。(http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/kekkaku-kansenshou18/index.html)
- 海外へ行く前には、厚生労働省検疫所HPで、現地の動物由来感染症について情報を得ておきましょう。(http://www.forth.go.jp/)
- 大阪市HPでは、犬猫の適正な飼い方などペットについての様々な情報を紹介しています。（http://www.city.osaka.lg.jp/shimin_top/category/700-12-0-0-0.html）

（調査研究課　微生物保健グループ　梅田 薫）